

OPAC 通信

Okinawa
Peace Assistance
Center

特定非営利活動法人
沖縄平和協力センター (OPAC)
沖縄県那覇市久米 1-5-18 稲福ビル 201-B
TEL (098) 866-4635 / FAX (098) 866-4638

www.opac.or.jp
2013 September (1)

Transforming Okinawa's Heart into Action

平和教育ワークショップ

8月30日、外国人学生も含め、県内外から大学生12名が参加し、OPAC 平和教育ワークショップが沖縄国際センター(OIC)で開催されました。OPAC 平和教育ワークショップは、平和とは何か、紛争はなぜ起こるのか、そして、沖縄県が掲げる平和教育が目指す人材育成のためにはどのような平和教育を実施すべきかについて考えるものです。今回のワークショップへの参加を通して、現在の日本の平和教育は多くの問題を抱えており、限界に直面しているということを強く感じました。



平和教育の目的について話し合う参加者

最も興味深かったのは、平和教育の目標と現在の平和教育の問題点についてのディスカッションでした。平和教育の目標や意義について、

学生が導き出した答えは、「戦争を再び起こさないこと」、そして「日本の歴史認識において加害国としての意識を持つこと」、さらに、「国際社会の平和に寄与できる人材を育てること」でした。

まず、戦争を二度と繰り返さないという点についてですが、沖縄戦という経験が背景にある沖縄の人たちは、私がこれまで出会った他の日本人と比べて、戦争の残酷さや旧日本軍による「過ち」についてより詳しく知っていると感じました。しかしながら、若い世代はそのような事実を知識として持っただけで、政府の「過ち」について、自らの考えに基づき批判の声をあげることに消極的です。これは、現行の平和教育の一つの限界を示していると思います。これまでも、多くの日本人と太平洋戦争について話す機会がありましたが、そこで感じたのは、想定していた以上に、日本人は過去に日本が起こした「過ち」を知っており、従軍慰安婦の問題など日本政府の方針や政治家の発言などに対しても疑問を感じているということです。一方で、その疑問を公にするとすると、集団心理や愛国心が絡み合い、極端な国家主義的な発言になるか、あるいは曖昧さでごまかすような発言に留まっているのが実態だと感じます。そして、この実態こそが韓国や中国などといったアジアの隣国との良好な関係を構築できないでいる最大の原因なのではないでしょうか。

このような現況を改善するためにも、学校での「平和教育」というカリキュラムにはさらなる向上が求められている

ます。例えば、決められた内容を教えるだけでなく、議論形式を用いて児童・生徒が自分の意見を持ち、それを発言できるような勇気と姿勢を養うといった方法が有効だと考えます。

次に、国際社会に寄与できる人材の育成という観点からも、一つ提案したいと思います。それは、どうしたら世界の平和へ貢献することができるのかを早い段階で子供たちに伝えることです。例えば、世界で発生し続けている紛争について教えるだけでなく、それら紛争の解決に努力している国連や民間団体あるいは人物を紹介し、平和を創る・支えるために自分はどうすべきか、何ができるかを子供たち自らが選択し展望を描けるようにすべきではないでしょうか。現在の日本の平和教育は、過去の戦争から、例えば原爆といった日本の被害者としての側面や、戦争の悲惨さに焦点を当てていますが、戦争の原因や解決策といった重要な点がおろそかになっているように感じます。これは、将来的に国際社会で生きていく子供たちにとっては「情報の不足」です。つまり、国際社会の平和へ貢献する人材の育成という目標に沿っていないということです。

最後に、「正しい歴史認識」についてです。沖縄戦に関する「歴史認識」の事例でも、沖縄だけで解決できる問題ではないと考えます。しかし、教育の内容を変えずとも、教育の「方法」を変えることはできるはずで、「正しい歴史認識」のために最も重要なのは、自らが情報を収集・学習し、判断する能力ではないでしょうか。共通の歴史認識を持たない外国人とでは、「事実」の認識にも相違が出るでしょうし、激論を交わすこともあるでしょう。しかし、争いをエスカレートさせないためには、認識の相違も踏まえた上で、客観的に判断する能力が大切だと考えます。



ワークショップ終了後の記念撮影

編集後記

OPAC 通信 9月号(1)を担当した早稲田大学国際教養学部2年生のキム・ワンスです。OPACで2週間インターンを行いました。今回のOPAC平和教育ワークショップに参加し、現在の沖縄の平和教育の現状と課題について考える機会を得ました。私自身は韓国人であり、平和教育を受けたことはありませんが、このワークショップを通じて、平和教育の良さや、沖縄の大学生が平和教育について今どのように考えているのかを知ることができ、とても良い経験になりました。読んでいただきありがとうございました。(キム・ワンス)